

會學濟經學大國帝都京

# 叢論濟經

號四第 卷八十第

行發日一月四年三十正大

故戸田海市博士肖像并に哀詞

## 論叢

虞夏書に見たる政治經濟思想たはれ . . . 法學博士 田島 錦治

階級の動學的考察 . . . 文學博士 高田 保馬

獨逸最近の社會學論 . . . 文學博士 米田庄太郎

植民地の經濟政策に就きて . . . 法學博士 山本美越乃

## 時論

不景氣と租稅 . . . 法學博士 神戸 正雄

## 說苑

一子相續制度に就いて . . . 經濟學士 八木芳之助

客觀的勞賃論の史的發展 . . . 經濟學士 森 耕二郎

## 雜錄

戸田博士逝く ○戸田海市君の追懷(西山幾太郎) ○戸田博士を憶ひ

て(福田樞三) ○戸田君の追懷(神戸正雄) ○追憶の斷片(河上盛) ○戸田

博士と私(河田嗣那) ○戸田先生を憶ふ(小島昌太郎) ○戸田博士と大阪

市労働調査事業(關 二)

## 客觀的勞賃論の史的發展 (二・完)

森 耕 二 郎

### 第二 リカアドの勞賃論(所謂勞賃鐵則說)

以上引用したる所の諸々の勞賃論の歸着する所は、その間にいくらかの差異があり、殊に何故に然るやの理由に至りては、之を概言するに困しむのであるが、要する所、一般的に之を蔽へば、勞賃は労働者の生理的、絶對的若くは最低必要生活資料(生活費)に歸すると云ふに一致してゐる。

然るに労働者の絶對的に必要な生活費を以て勞賃を決定せんとすることは、勞働(力)を一種の商品として觀じ、而も特種の商品として見るに於て、必ずしも容易に是認せらるべきでない。即ち勞賃は必ずしも絶對的に必要な生活費に依りて決定せらるゝにあらずして、それが決定には文化的道德的要素の關與するものではないか、と云ふことが考へられる。次に勞賃決定の法則を説明するに當りては、現實の勞賃現象——即ち勞働(力)の需要供給如何により常に動搖する所の——概言すれば勞賃の動態とも云ふべきものを説明する所の、勞賃の動的法則若くは現實勞賃の法則の存在するとともに、これが據つて立つ基礎を爲す勞賃の靜態とも云ふべきものを説明す

る所の、勞賃の基本的法則若しくは、靜的法則の存在することを認むるにあらざれば、眞實なる勞賃現象の説明を得ることが出來ぬのではあるまいか、換言すれば勞働(力)を一種の商品と看做し、一般商品に於けると同じく、勞働(力)の價値の觀念と其價格の觀念(リカアドに於ては勞働の自然價格と市場價格)とを別々に考慮することが、勞賃現象を説明するに就て何より必要のことではないか、而して以上述べたる所の諸々の勞賃論は概ね此點に關して明確なる理解がなく、主として勞働(力)の價格の問題、即ち勞賃の動態を説明せんとするのみであつて、それと並んで其靜的的基本的なる勞賃の本質、勞働(力)の價値に就ての問題が存在すべきことを閉却してゐたのではないか、と云ふことが考へられる。

これらのことを瞭らかにして、勞賃現象を經濟學の研究の對象として、初めて正當なる取扱を爲すに一步を進めるに至つたと認むべきものは、正統學派に於けるリカアドの勞賃論であると思ふ。

彼に於ては、勞賃(勞働の自然價格)は、絶對的必要生活費に依りて決定せらるゝものにあらずして、其國、其時代に於ける慣習により必要とせらるゝ、生活費(食物、必需品及び便利品の代價)に依りて決定せらるゝものであるとして、勞賃の決定を生理的に確定することより離れてゐるのみならず、彼は、一般商品に於けると同じく、勞働の自然價格と市場價格とを截然區別して、各々其支配する法則を瞭かにせんとした。且つ彼が『平均勞賃』、『平均勞働者』なる觀念を其研究の對象となし、勞賃現象を個々の具體的に見ることにより遠ざかつて、それを社會的抽象的

普遍的に觀察することゝなつたことは、勞賃問題の研究に一步を進めたものであると云ふことが出来る。以下私は此立場にありて勞賃問題を取扱つた所の、リカアアの勞賃論を檢討して見たいと思ふのであるが、已に彼れの以前にタランスがあつて、彼れの所説に近き勞賃論を述べてゐることは注目に値ひするであらう。(註)

(註) 『勞働を正しく觀察する方法は、之を市場に於ける一商品として觀察するにある。従つてそれは……市場價格と自然價格とを有つてゐる……この自然價格は、勞働者自身を養ひ、且つ市場に勞働の増減なき供給を保つ丈の家族を養ふために、其國の氣候と慣習とが之を必要とする生活必需品及び愉樂品の分量より成る。』

さてリカアアの勞賃論を見んに、彼に於ては、一般商品に於けると同様に、勞働は其自然價格と市場價格とを有つてゐる。これは彼以前の勞賃論に於て明に見るを得ない所であつて、彼れの勞賃論の一特徴を成してゐる。先づ勞働の自然價格とは如何なるものなりやと云ふに、

『勞働の自然價格とは、勞働者をして相互に増加又は減少することなしに生存をなし、且つ其種族を永續するを得せしむるに必要な價格の謂である。』

『勞働者が彼自身及家族——勞働者の數を維持するに必要である所の——を支ふるの力は、彼が勞賃として受取る所の貨幣の分量如何によるのではなくして、その貨幣で購買することが出来るであらう所の、而して慣習上彼に必要不可欠のものとなれる所の、食物、必需品及便利品の分量如何に依るのである。それ故に勞働の自然價格は、勞働者及彼れの家族を支ふる爲めに要求さ

1) Torrens, An Essay on the External Corn Trade, 1815, p. 62.

る、食物、必需品及び便利品の價格如何に依る。食物及び必需品の價格の騰貴に伴うて、勞働の自然價格は騰貴するであらう。其價格の下落に伴うて、勞働の自然價格は下落するであらう。<sup>1)</sup>次に彼れの謂ふ所の勞働の市場價格とは、『供給の需要に對する比例の自然的作用に依つて、それに對して事實上支拂はるゝ所の價格である。勞働は勞働の稀少なる時に高く、豊富なる時に安い。如何に甚だしく勞働の市場價格が其自然價格から離れやうとも、それは他の貨物の如く、之に一致せんとするの傾向をもつてゐる。』<sup>2)</sup>

かく勞働の自然價格は、常に市場價格が不斷に一致せんとする所の、基本的價格であるが、この價格の構成に與かる所のものは、右に引用したる文句が示す如く、生理的絕對的に必要なる生活品の價格にあらずして、『慣習上彼に必要缺くべからざるものとなれる所の、食物、必需品及び便利品』の價格であつて、確定的のものにあらずして、時處に應じて變動することを得るものである。このことは彼れの勞賃論と(第一)に於て述べたる勞賃論とを分別する最も主なる特徴である。云ふことが出来るであらう。此點に關し猶ほ他に左の如き章句が見出される。

『勞働の自然價格は、それが食物、必需品に評價せらるゝ場合にも、絕對的に確定不動なるものとは思つてならない。それは同じ國の中に於ても時により異なり、而して異なる國に於ては著しく相違がある。勞働の自然價格は主として國民の風俗習慣に依存してゐる。英國の勞働者は、若し彼れの勞賃が馬鈴薯を買ひ、粘土小屋に住居せしむることを得せしむる程度のものであつたならば、かゝる勞賃を目して自然率以下のものとなし、一家族を養ふに足らぬものと看做す

- 1) Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, Conner's ed. p. 70.
- 2) Ricardo, *ibid.* p. 71.

であらう。しかしこの僅少な自然的欲求も、「人間の生命が低廉で」、人間の欲望が容易に満たされ得る國に於ては、充分であると看做されることが屢々ある。現今英國の田舎家に於て享樂されてゐる多くの便利品も、我々の歴史の初期に於ては贅澤品と思はれたことであらう。<sup>1)</sup>〔註〕

〔註〕リカドの勞賃論を悲觀的勞賃論と見ることは彼れの趣意を解説せるものであるとして、マアシャルは左の如く言つてゐる。

『彼(リカド)』が「食物、必需品に評價せらるゝ所の勞働の自然價格は、絶對的に確定不動なるものと思つてはならない。

……それは主として其國民の風俗習慣に依存してゐる」と明らかに云つてゐることは是に事實である。しかし乍ら一度かく云つた後、彼は右の詞を繰り返へすことを爲さなかつたので、彼を讀んだ大部分のものは、彼れのかく云つたことを忘れてゐる。彼は勞賃論を行つて居るうちに、屢々チユルゴ、重農學派と相似たる話し方を採つた。そして彼は、勞賃が最低生活必需品を越へるや否や直ぐ増加する所の人口の傾向は、勞賃をして「一の自然法則に依り最低必需品迄下げしめる」と云つたかのやうに見へるのである。<sup>2)</sup>

又ゴナアは自分の編纂にかゝる所のリカドの『經濟學及び租税の原理』に於て、右に引用せる章句に註して云ふ。

「この章句や他の之れに似たる章句は、リカドの勞賃論を勞賃鐵則と名付けて、それを疑念を以て語るハタにより、常に又は殆んど常に忘却されてゐる。然るにそれが最も重要なのだ。<sup>3)</sup>」

かく勞働の自然價格の決定に慣習的に時處に應じて動的なる生活必需品を與からしむることは、晩年に於けるマルクスに依りて一段と高調せられ、其著『資本論』、及び『價值、價格及利潤』に於て、明らかに仔細に述べられてゐる。而して勞賃をかく決定することは、勞働力の價值(こゝでは勞働の自然價格)なる概念が、自然科學的範疇ならず、一の文化科學(歴史科學、社會科學)的範疇なるに於て、正に當然のことと云はねばならぬ。

1) Ricardo, *ibid.* p. 74.

2) Marshall, *Principles of Political Economy*, 8ed. 1920, p. 508.

3) Gonner, *Ricardo's Principles of Political Economy and Taxations*. Gonner's ed. p. 74 Note.

次に勞働に對する需要(資本)供給(勞働人口)如何に依り常に動的なる所の、勞働の市場價格は如何にして其自然價格に一致するか、而して社會の進化に伴うて勞働の市場價格は其自然價格に對して如何なる關係の下に置かるゝか、と云ふことにつき少しく彼れの説く所を見るであらう。

『勞働の市場價格が其の自然價格を超へたる場合には、勞働者の境遇は佳良にして幸福なるものとなり、彼は比較的多量の生活必需品及享樂を支配し、從つて健康なる多數の家族を養育することが出來得るやうになる。しかし乍ら高き勞賃が人口の増殖に及ぼす獎勵に依つて、勞働者の數が増加する時には、勞賃はその自然價格迄再び下落し、時としては反動の結果この水準以下に下落することさへある。』

『勞働の市場價格が其自然價格以下に低落する場合には、勞働者の境遇は窮乏の極に達する、即ち慣習上絶對的不可缺となつてゐる慰樂物でさへ彼等の手から奪ひ去られて終ふ。而してかゝる缺乏の結果勞働者の人口が減少するに至るか、勞働に對する需要がより増加したる後に初めて、勞働の市場價格は其自然價格迄昇り、かくて勞働者は勞賃の自然率が與ふる所の相當なる享樂物を享受するに至るであらう。』<sup>1)</sup>

かくの如く勞賃は其自然率に一致せんとする傾向を有するに拘はらず、向上發展しつゝある社會にありては、勞働の市場價格は、或る不定の期間内、斷へず其自然率よりも上にあり得る。蓋しかゝる場合には勞働の需要(資本)の増加が、其供給(勞働人口)の増加より一層大なるからである。しかし乍らかゝる勞働者に好都合なる事情は長く永續するものではない。社會の自然的發達

1) Ricardo, *ibid.* p. 71-2.

の或る時期に達すると、勞働の需要は其供給より超過し、勞働の市場價格は下降するに至る。何故なれば勞働者の供給は同じ程度で増進して行くが、勞働者に對する需要即ち資本の増加は、勞働生産力漸減の結果——資本蓄積増加—勞賃騰貴—人口増加—穀價騰貴—劣等地耕作—勞働生産力減退——漸次鈍るに至るであらうからである。<sup>1)</sup>

右述べたる所により瞭らかなるが如く、リカアドは、勞賃の自然價格の市場價格より離れ、而して遂にそれに一致する機構を、人口は食物が許す限度迄増加せんとする傾向があるとの、マルサス人口原則の上に置いてゐることがわかる。従つて此點に關する彼の主張の是非は、マルサスの人口原則そのもの、當否の外に、食物の増減に比例的に動く所の人口の増減は、果して勞賃の市場價格と自然價格との動搖一致に、彼の信するが如く、影響を與ふるや否やと云ふことに懸る。マルサスは勞働力の價値の實現、即ち現實勞賃の動搖の問題を論ずるに當り、リカアドの如く、かく絶對的人口の増減により、勞賃の上下を説明せんとするを排し、相對的人口、即ち産業豫備軍の増減により、如何に勞働力の價格が其價値より離れるかを説明してゐるのである。

以上私はリカアドの勞賃論を大體述べ終へたのであるが、要する所、彼の勞賃論は、同じく勞賃を客觀的に生産費に依つて決定せんとするに拘はらず、初期の客觀的勞賃説即ち絶對的必要費説より遙かに遠ざかつてゐることを知るのである。而してリカアドの勞賃論は絶對的必要費説よめいくらか樂觀的なるものであることは云ふ迄もない。

1) 詳細は Ricardo, *ibid.* pp. 72, 73-4. 及び Diehl, K., *Erläuterungen zu Ricardo's Grundgesetzen der Volkswirtschaft und Besteuerung*, Teil I, S. 7-13, 85-134. を見よ。

2) Diehl, K., a. a. O., S. 52-65.



然るにこのリカアドの勞賃は、其後ラツサルに依り、勞賃鐵則 (Das eherne (ökonomische) Gesetz) の名の下に、勞働者の悲惨なる境遇を暗示するものとして、最も悲觀的なる勞賃論と解せられ、勞働者解放運動に利用せらるゝに至つたと云ふことは、寔に奇しき運命であると云はねばならぬ。私は左にラツサルの所謂勞賃鐵則に就て若干の考察を試みて見やう。

彼は一八六三年に公表したるかの『公開答狀』に於て、勞賃鐵則に就て次の如く述べてゐる。

『現今の諸關係の下、即ち勞働に對する需要供給の支配の下にありて、勞賃を決定する所の、經濟鐵則とは次の如きものである。——平均的勞賃は常に一國民の間にありて生存の持續及び繁殖に習慣的に必要とする所の缺くべからざる生活維持に歸着する。此點を中心として實際の日勞賃は常に振子運動を爲しつゝそれを歸着せんとし、決して久しく此點以上又は以下に留まることはない。勞賃は永く此平均を超へることが出來ない。蓋し若し然らざれば勞働者の境遇は容易且つ可良となり、勞働者の結婚従つて蕃殖の増加を促がし、かくて勞働人口の増加即ち勞働者の供給の増加となり、結局勞賃をして再び以前の所に戻すに至るからである。』

『又勞賃は長く此生活維持の下に甚だしく低落することは出來ない。何故なればかくの如きに於ては、移住、獨身、産兒制限などが惹起され、更に最後に窮乏による勞働人口の減少を見るに至り、爲めに勞働者の供給は減少し、勞賃は再び以前の狀態に押し戻さるゝに至るからである。』故に實際の平均勞賃は斷へず勞賃が歸着する所の重點を中心に旋廻する。即ち或る時は此點より上に(凡ての又は個々の勞働部門に於ける好況時期)、或時は此點より下に(多かれ少かれ一

1) Lassalle, F., Offenes Antwort-schreiben an das zentral-komitee zur Berufung eines allgemeinen Deutschen Arbeiterkongresses zu Leipzig, 1. März, 1863.

般的なる逼迫、恐慌の時期) 動搖するのである。

『平均勞賃は一國民に於て習慣上生存の維持及蕃殖に必要とせらるゝ生活必需品に限定せらるゝ、と云ふこと——これが、更に再言すれば、現今の事情の下に於て勞賃を支配する所の、慘酷なる鐵則なのである。』<sup>1)</sup>

右に引用したる章句の示すが如く、ラッサルの所謂勞賃鐵則は、平均的勞賃(勞働の自然價格)、實際的勞賃(勞働の市場價格)の存在を認め、且つマルサス人口原則の上に立つてゐるのであつて、それは彼が已に定説となつて居ると信じてゐた所のリカアドの勞賃論に外ならない。(註)隨つて又彼は、勞賃の決定に、絶對的生活必要費説と異なり、慣習的に必要なる生活資料を顧慮することを忘れてゐない。此點に關し猶ほ左の如き彼れの言葉が見出される。

『併し乍らこの外部的限界(各々の時代の欲求に従つて必要生活費に屬するもの、限界)それ自身は、異なる時代／＼に於て其場合の出來事に應じて變化したものであつた。だから若し人が異なる時代を相互に比較して見ると、最近世紀又は時代に於ける勞働者階級の狀態は、——現在慣習的なる必要生活費の最低額が若干昇つたと云ふ限りに於て——それ以前の世紀又は時代の勞働者階級の狀態と比較して若干改善せられてゐると云ふことを知るであらう。』<sup>2)</sup>

(註)ラッサルの所謂勞賃鐵則説は、リカアドの勞賃論を借り來つたものであるから、二者其内容構成の點に於て殆んど同一であるが、前者の立場が全然異なつてゐる結果、それに附せられたる意義に於て、二者の間に根本的なる差異が横はつてゐる。

即ちリカアドに於ては資本主義組織、私有財産制度は社會的生活の自然的狀態であるとする結果、勞賃が慣習的に必要なる生活費に歸着すると云ふことは、永遠恒久なるべき現今の社會制度に必然的に隨伴すべきものであつて、避くべからざるの自

1) Lassalle, F., Gesammelte Reden und Schriften, 1919, Bd. III, S. 58-9.

2) Lassalle, F., a. a. O., S. 62.

然法則と着做されてゐた。然るにラッサルはかくの如き事實を、經濟生活の或る一定の歴史的發達段階に於てのみ生起する所の一の歴史的事實であるとした（これは近世社會主義者の通行に支持する態度である）かくてラッサルはかゝる勞賃現象を、而して勞働者の困窮、若くは從屬的關係を、勞働者によりての産業組合の設立によりて除去し得ると信じたのである。

リカアド、ラッサルの所謂勞賃鐵則は、勞賃は、勞働の生産力若くは其效用の増減に依據することなくして、客觀的なる生産費の如何により決定せらるゝものであると云ふのであるから、假令この勞賃説が勞賃の決定要求に慣習的に必要なる生活資料を認めてゐるとは云へ、それは勞働者階級の他の階級に對する全社會所得分配關係より見れば、寔に悲觀的なる勞賃論であると云ふことが出来るであらう。而してラッサルはかゝる意義に於て、現今の支配關係の下に於ける勞賃の狀態を述べ、勞働者階級のかゝる狀態より解放せらるべきことを説いたのである。(註)然るにリカアド、ラッサルの勞賃論の勞賃鐵則たる所以は、かゝる意義に於てはなく、それが絶對的生活必要費説であるが爲であると解せられて居ることが往々ある。例へばデイドは勞賃鐵則説を解して、それは、『勞賃は、必らず勞働者自身と其家族との生計に嚴密に必要な最低限度迄低落すべきものである、更に一般的に之を云へば勞働者の人口が衣食を支へ子女を残すに足る最低限度迄引き下げらるべきものである。』<sup>1)</sup>と、云ふのであるとしてゐる。其他鐵則の名に眩惑せられて無意識のうち、勞賃鐵則をかゝる意義に解せるものが尠からずある。しかし乍ら勞賃鐵則説の名の下に、敢て凡ゆる勞賃の生産費説、若くは悲觀的勞賃説を包含せしめんとするならば兎も角、所謂勞賃鐵則説をかゝる意義に解することの不當なるは云ふ迄もないであらう。

1) Gide, C., Principes d'Economie Politique. 1920, p. 559.

〔註〕若し諸君が勞働者の状態に就て語り、彼等の状態の改善されて行くことを云ふ時には、諸君は彼等の状態と現在の同胞市民の状態とを比較する、即ち同時代の生活慣習の標準と比較してあるのである。〔1〕

「故に人間の凡ゆる困苦窮乏は、欲望満足手段の、其時代に既に存在してある欲望と生活慣習とに對する關係にのみ懸る。凡ゆる人間の窮迫欠乏、凡ゆる人間の欲望、而して凡ゆる人間の状態は、それ故に、同時代の他の人間が慣習的なる生活欲望に關して如何なる状態にあるか、この比較に依つてのみ測られ得るのだ。要するに一階級の状态如何は、常に同時代の他の階級の状态に對する關係によつてのみ云ふ爲され得るのである。〔2〕

かのマルクスが勞賃鐵則説の支持者であつたか否かに關しての論争〔註一〕の如きも、先づ勞賃鐵則説の意義如何を決定することが先決問題である。マルクスは勞働力の價值決定の要素として、歴史的進徳的に必要なる生活資料、更には教育費をも認めて居るのであつて、彼れの勞賃説は、決して最低必要生活費説と趣を同じうするものではないが、彼は、其勞働力の價值の實現の場合には、現實勞賃は、資本蓄積の進行に基づく資本の有期的構成の變化により生ずる所の、産業豫備軍の増加により、漸次其價值以下に陥入らんとする傾向の存するものなることを云ひ、現今の生産方法の下に於ける悲惨なる勞働階級の運命を畫いてゐるのであるから、勞賃鐵則説を以て凡ゆる悲觀的なる勞賃論を意味せしむるならば、マルクスの勞賃論は或る意味に於て最も酷薄なる勞賃の鐵則といふことが出來やう。しかし乍ら勞賃の鐵則をかく廣義に解することの不適當なることは云ふ迄もない。マルクスの勞賃論と勞賃鐵則との間に、其内容構成の諸點に於て、格段の相違のあることは、彼れの勞賃鐵則に對する直接の反駁を俟たずとも、彼の晩年の著書殊に『資本論』に於て彼れの説く所により容易に看取することが出來るのである。〔註二〕

1) Lassalle, F., Offenes Antwort-schreiben, Gesammelte Reden und Schriften, 1919, Bd. III, S. 64.  
 2) Lassalle, F., a. a. O., S. 65-6.  
 3) 後年のマルクスを指す。

(註) 一例へばザオルフミンンバルトの論争<sup>1)</sup>

(註) ニゴッタ綱領(一八七五年五月、ラッサルの一派とアイヒナハ派(ペーベル、リープクネヒト)とが妥協して可決した所の謂妥協綱領)の中の章句、——「この根本的綱領より出發して、獨逸社會主義労働黨は、凡ゆる合法的なる手段を以て、自由國家、社會主義的社會の獲得、勞賃制度の廢止に、依りて、勞賃鐵則の破砕、凡ゆる形に於ける搾取の廢止、及び凡ゆる社會的政治的不平等の根絶に努む。」——に對して、マルクスは同年五月五日プラツケに宛てたる所謂ゴッタ綱領批評に於て左の如く云つてある。

『併し乍らもし私がラッサルの刻印あるこの法則を彼れの云ふが如き意味にて採用するならば、其論據をも認めねばならぬことになる。それは何であるか? それは、ラッサルの死後間もなくランゲが示したやうに、マルサスの人口原則(ランゲ自身によりても唱へられた)に外ならぬ。しかし若しこの原則が正しいならば、如何に賃労働を廢止しても、此勞賃法則を廢止することは出來ぬ。蓋しこの法則は賃労働制のみならず、凡ゆる社會制度を支配するものであるから。實に此理由により五十年來或は更に久しく、經濟學者は、社會主義の自然に基づく困窮を廢止すること能はずして、たゞ之を普通化し、同時に之を社會の全面に分配し得るに過ぎざることを論證し來たのだ。』<sup>2)</sup>

## 結 論 (附、マルクス初期の勞賃論)

以上述べたる所により、私は、チユルギー以下の勞賃の最低必要生活費説、及びリカアドの勞賃論若くはラッサルの所謂勞賃鐵則説の如何なるものなるかを述べ、その何故に後者が前者よりの發展進歩せる形であるかの理由を明にせんと試みた。既に前にも述べたる如く、リカアドの勞賃論は、勞賃の最低必要生活費説より、左の諸點に於て異なる。

(一) リカアドは、チユルギー以下の勞賃は生理的絶對的必要生活費に歸着せんとすると云へるに

- 1) Wolf, J., Sozialismus und kapitalistische Wirtschaftsordnung, 1892. Sombart, W., Brauns Archiv für soziale Gesetzgebung, Vb. 5, 493.
- 2) Das Gothaer Programm, Mai 1875. (Diehl u. Mombert, Ausgewählte Lesestücke zum Studium d. P. E. Sozialismus, Kommunismus, Anarchismus, Teil II, S. 128.)
- 3) Marx, Kritik des sozialdemokratischen Parteiprograms, (Aus dem Nachlass von K. Marx, Neue Zeit, Bd. IX, 1890/91, S. 570. od. Diehl, u. Mombert, a. a. O., S. 150.)

反し、勞賃の決定に慣習的に動的なる生活品(食物、必需品及び便利品)の與かることを認め、勞賃の自然科學的取扱より一步を離るゝに至つたこと。

(二) 勞働の價格即ち勞賃を自然價格と市場價格とに分つことにより、勞賃の法則を基本的(靜的)現實的(動的)の二つの法則に分ち考へ、實現勞賃の現象は、勞賃の動的法則により動搖常ならざるものであるが、究極する所それは勞賃の靜的若くは基本的法則(即ち勞働(力)の價值法則)によつてのみ説明せらるべきことを主張したこと。

(三) リカアドは、何故に勞賃は結局生活費に歸着するか、の機構を詳細に瞭らかにしたこと、即ち彼は、勞働の自然價格と市場價格との一致及び背離の原理をマルサス人口原則に求めてゐる。

要する所、リカアドの勞賃論は、勞働(力)を善く商品的一種と看做すことにより、客觀的勞賃の理論に一段の進歩をなしたことは疑ふべくもないのである。

然れどもリカアドの勞賃論は、果して社會發達の一定の歴史的阶段たる資本主義組織に特有なる勞賃現象を充分に克く説明し得たりと云ふことが出来るであらうか？ 彼は現今の社會制度、組織の恒久的存續を信じ、従つて其下に生起する所の經濟現象の歴史的现象なることに考へ及ばなかつた結果、それ等の現象に妥當なりとせらるゝ所の諸々の經濟法則は、猶ほ多分に因果の自然法則の域を越せざるものであつたが、勞賃の法則に於ても同様にそれを經濟法則の一として取扱ふことに就ては、なほそこに幾多不満足の點の存在するのを見るのである。

而してリカアドの勞賃論は、其後マルクスに至つて、方法論的にも内容的にも更に一段の純化

發展を遂げ、マルクス特有の勞賃論を形造くることとなり、彼れの經濟理論の基礎的出發點を成すに至つたのである。しかるに彼れにありては、彼れの他の經濟理論に於けると同じく、彼れの初年の作物に現はれたる勞賃論と其晩年の作物に現はれたるそれとの間には、若干の相違、進歩がある。そうして彼れの初年の勞賃論は前述せる諸々の勞賃論より未だ脱してゐなかつた。今やチルゴー、及びリカアドの勞賃論を述べ終り、マルクスの勞賃論を檢討することとなつたのであるが、それに就て彼れの初年に於ける勞賃論を顧みて置くことも強ち徒勞の業ではないと思ひ、茲に其一端を紹介することにした。

彼は、一八四六、七年の冬ブルードンの『貧困の哲學』に對する論駁のため書かれたる彼れの著『哲學の貧困』に於て、左の如き勞賃論を試みてゐる。

『商品の相對的價值が其生産に要する勞働に依つて決定せらるゝものならば、其必然の結論として、勞働の相對的價值即ち勞賃も亦同様に其生産に必要な勞働量に依つて決定せらるゝことになる。勞賃即ち勞働の相對的價值若くは價格は、それ故に、勞働者がその生活維持に必要な一切のものを造る爲めに必要な勞働時間に依つて決定せらるゝ。帽子の生産費が減少すれば、假令需要は二倍三倍若くは四倍になつても、其價格は結局その新しい自然價格迄下落するであらう。同様に人間の生活費が、生活に必要な食物衣服の自然價格の低減のために、減少すれば、假令勞働者に對する需要が著しく増進しても、猶ほ且つ勞賃の下落するを見るであらう。』(リカアド) 確かにこのリカアドの詞は酷薄を極めてゐる。帽子は製造費と人間の生活費とを同列に置

くは、人間を化して帽子となすものである。しかし乍ら酷薄なることは事物そのものに存するもので、決して事物が表はす詞に存するものではない。佛蘭西の論客ドロツ、ブランキイ、ロツシイ其他の諸君は、「人道的なる」詞を使ふと云ふ禮儀を守ることに依つて、英國經濟學者に對する優越を立證する無邪氣な満足を感じてゐる。彼等がリカアド及其學徒の酷薄なる用語を非難するのは、經濟關係が赤裸々に其真相を暴露し、ブルジョワジイの秘密が洩らされるのを見るのが嫌だからである。要する所労働は、労働が商品である場合には、労働なる商品の製作に必要な労働時間に依つて測られる。然らば労働なる商品を造るのに何が必要であるか？ そは労働の間斷なき維持、即ち労働者をしてその生命を支持し、且つ彼の種族を繁殖せしむることが出来る爲に缺くべからざるものを生産するに必要な労働時間である。労働の自然價格は勞賃の最低額に外ならぬ。』

更に一八四八年マルクス、エンゲルスに依つて公表せられたる、かの有名なる『共產黨宣言』には、左の如き言葉が發見せらるゝ。

『労働者が必要とする費用は、殆んど彼自身を維持し、及び其種族を蕃殖させるに必要なだけの生活資料に限らる。然るに商品の價格は、従つて労働の價格も、その生産費に等しいものである。そこで労働の没趣味が増加すればする程、それと同じ程度に於て勞賃は減少する。』<sup>2)</sup>

『労働の平均價格は勞賃の最低價格であつて、労働者が生存を維持するに必要な生活資料の總額である。故に労働者が自分の活動に依つて獲得する所のものは、只僅かに彼の赤貧なる生活

1) Marx, Mi-é e de la philosophie, 36 édition, pp. 357. Das Elend der Philosophie, 9 aufl. 1921, S. 23-4.  
2) Marx, u. Engels, Das kommunistische Manifest, Freiheit Ausg. S. 25. Autorisierte Ausg. Berlin, 1899, S. 14.



を持續するに足るだけである。』<sup>1)</sup>

右の引用によつて明らかなるが如く、マルクス初期の作物に表はれたる勞賃論は、其内容に於てリカアドの勞賃論に影響せらるゝ所あるに拘はらず、其歸着する所はチユルゴー以下の最低必要生活費説に近きものであつたが、彼は其後に至つて漸次其考へを變へるに至つた。<sup>註</sup>而してこのことはエンゲルスに於てもは同様であつた。此點に關して彼は、マルクスの『哲學の貧困』に於ける、さきに引用せる章句の脚註に於て、其事情を開陳してゐる。それに曰く。

『勞働力の自然價格即ち正常價格は、勞賃の最低限即ち勞働者の生存及蕃殖に絶對的に必要な生活資料の等價と一致するとすこの章句は、私により初めて、「國民經濟學批評要領」(獨逸年報、巴里一八四四年)、及び「英國に於ける勞働者階級の狀態」に於て、主張せられたものである。

讀者の茲に見らるゝ通りマルクスも其當時は、此章句を支持してゐた。そうしてラツサルは吾等二人から此文句を採つたのである。しかし假令實際に於ては、勞賃は其最低限に近づくかんとする不斷の傾向を有すとは云へ、上記の文句は間違つてゐる。勞働力は大體に、平均的には、其價值より以下に支拂はれる事實があつても、それは其價值を變ずることが出来ない、マルクスは、「資本論」に於て上記の章句を正しく取扱つてゐるのみならず(勞働力の賣買なる節に於て)、資本家的生産により、勞働力の價格が其價值以下に漸次下降するの事情を開陳してゐるのである(第二十三章、資本制蓄積の一般的法則)。<sup>2)</sup>

(註)『勞働と資本』——それはマルクスが一八四七年ブリュッセルなる獨逸人勞働者協會に於て試みし講演を本とし、其後一八

1) Marx, u. Engels, a. a. O., Freiheit ausg. S. 32. Autorisierte Ausg. S. 19.  
2) Engels, Marix's das Elend der Philosophie, gauf. 1921, S. 24 Note.

四九年四月四日以降の「新ライン新聞」の論說欄に連載せられたるものである。に於ては、勞働(力)の價格に就き、以前の著書に於けるよりはいくらか異なつてゐる個所が見出される。此點に關する彼の所説を左に少しく引用する。

『さて一般に商品の價格を決定する所の、同じ一般法則は、ものづから又勞賃を、(即ち)勞働の價格を決定する。

『勞働の實錢は、需要及び供給の關係如何により、(詳しく言へば)勞働(力)の買手(即ち)資本家と、勞働(力)の賣手(即ち)勞働者との間に於ける競争の状態如何により、今騰貴したかと思へば、直ぐ下落する。勞賃の變動は、一般の商品價格の變動に適應する。けれども斯かる變動の因に於て勞働の價格は生産費によつて、(即ち)勞働(力)といふ此商品を生産するに必要とせらるゝ勞働時間によつて、決定せらるゝであらう。

『然らば勞働(力)そのものゝ生産費とは何であらうか？

『それは勞働者が勞働者として生計を營むため、且つ彼を勞働者に教育するため、必要とせらるゝ費用である。

『だから一の勞働が必要とする教育の時間の短きに從つて、勞働者の生産費は僅かであり、それに應じて彼れの勞働の價格、彼れの勞賃は低い。殆んど全く見習期間を必要とせず、且つ勞働者の單なる肉體的存在があれば足るといふやうな産業の部門になると、彼れの生産に必要とせらるゝ生産費は、殆ど單に、彼をば勞働し得る生活狀態を維持するために必要とせらるゝ商品にのみ限られる。だから彼れの勞働の價格は生活必要品の價格によつて決定せらるゝであらう。……』

『かくて單一なる勞働(力)の生産費は、總計すると、勞働者の生存費及び生殖費となる。此生存費及生殖費の價格が勞賃を形成する。かくて決定されたる勞賃は、之を最低勞賃と名づける。』<sup>1)</sup>

かくの如くマルクスは其初期の作物に於ては、未だ彼特有の勞賃論を見るに至らず、それ等に現はれたる勞賃論は寧ろなほチユルゴー、リカアドのそれに近きものであつたが、其後期の作物に於て、彼は幾多の點に於てリカアドの勞賃論より一步を進むるに至つた。彼れの晩年の完熟せる勞賃論は、之を別稿に於て詳しく研究することとし、茲には單にリカアドの勞賃論とマルクス

1) Marx, Lohnarbeit und Kapital, von Kautsky, S. 23-4.

(河上博士譯、『賃勞働と資本』勞賃、價格及利潤』五二一五頁、同譯に據る)

のそれとの間に横はれる重要な相違點を簡單に列擧して、此稿を終りたいと思ふ。

(一) マルクスは勞働と勞働力との觀念を分別し、勞賃は勞働力の價格であつて、勞働の價格ではない、勞働の價值、價格なるものは決して存在しないと云ふ。

(二) 一般商品の價值論に於て兩者の間に存在する所の最も重要な差異——マルクスが謂ふ所の價值とは、質的には廣く抽象的人間勞働の、又量的には社會的に必要なる勞働の分量を意味するものであつて、リカアドが謂ふ所のそれとは其内容に於て大いに異なる、——は、同様に勞働(力)の價值(リカアドに於て勞働の自然價格)の決定の場合に於ても認められる。

(三) 隨つて勞働力の價值と價格との關係(リカアドに於ては勞働の自然價格と市場價格との關係)に就て兩者の主張が異なつて來る。即ちリカアドに於ては勞働の自然價格は、其市場價格の、現實社會に於て、究極に一致すべき點であるが、マルクスに於ては必らずしも然らず。勞働力價格(勞賃)は其價值に支配せられ、價值は價格の内的基本的要素を成すものであるが、現實社會に於て究極に於て二者相一致すべきものとはしない(假令勞働力商品には平均利潤率の法則作用せずとも)。

(四) 勞働力の價值(勞働の自然價格)決定に與る所の勞働者の生活資料に於て認めらるゝ社會的歴史的道德的要素は、リカアドに於ても若干見らるゝのであるが、マルクスに至つて更に一段と高調せられてゐる。

(五) 勞賃の法則は、リカアドに於ては、殆んど因果的自然法則として取扱はれてゐるが、マルク

スに於ては、それは一定の歴史的發達段階に於てのみ妥當する所の、歴史的、文化的若くは社會的普遍化法則として觀せられてゐる。

(六) リカア드의勞賃論はマルサスの人口法則(一の自然法則)の上に立脚してゐる。即ち一般商品の自然價格との一致の機構を一般平均利潤率の法則に求めると同じやうに、勞働の自然價格と市場價格との一致の機構をマルサスの人口原則に依つて説明してゐる。随つて又勞働の市場價格の變動如何は、絶對的自然的人口の増減如何に懸る(リカア드의勞賃法則の自然法則であることの一證である)。然るにマルクスは勞働力の價值と價格との一致の機構を云はず、而して現實勞賃の動搖如何を、一の歴史的なる資本主義的生産方法に特有に存在する所の人口法則、即ち彼の所謂相對的人口法則若くは産業豫備軍の理法に依つて説明してゐるのである。(完)